

炉辺談話 (No.167 ~ 185) に掲載されたものです

「夢を打ち上げるんやない。夢で打ち上げるんや！」

今年9月、歌志内で商工会議所青年部の全道大会がありました。
記念講演の講師は青木豊彦氏。
人工衛星を民間で打ち上げるということで話題になっている方です。

軽快な大阪弁で熱っぽく語る青木氏の話に引き込まれ、1時間半があっという間に過ぎました。

終わってみますと、心に残るエッセンスが多数あり、記憶が次第に風化してしまうのがもったいないということで講演内容をまとめてみました。

講演から2ヶ月近くが経過し、記録テープもなく記憶に残ったことを断片的に繋ぎ合わせた拙文でありますので、青木氏の講話記録というよりも、「私」が感じた講話録ということで認識下さい。



(株)アオキ 代表取締役 青木豊彦 (59歳)

実際に話していない事柄も、想像し得る背景として加筆しています。
記憶の範疇でできるだけ忠実に活字に落とします。

記憶違いにより細部の名称が違っている箇所もあるかと思えます。ご容赦下さい。

講演テーマ

「夢を打ち上げるんやない。夢で打ち上げるんや！」

講師 青木豊彦

1. 大阪人 青木豊彦

「こんなことやっているせいで、人より高いところで話すことが多くなりましたわ。それに反比例して（会社の）業績は下がりっぱなしや！ ハハハハ！」

人なつっこいダミ声が会場に響いた。
今大会の記念講演の講師は、青木豊彦氏。

講師肩書きは「東大阪宇宙開発協同組合
理事長」とある。



講話内容に入る前に、青木氏のプロフィールに若干触れておこう。
青木氏は1945年終戦のとき大阪府に生まれた。高校卒業後、父親が経営する青木鉄工所に入社、1995年社名を「株式会社アオキ」に変更し、二代目社長に就任。
1997年、アメリカのボーイング社の認定工場となる。2002年、東大阪宇宙関連開発研究会が設立され、会長に就任。同年12月、東大阪宇宙開発協同組合を設立、理事長に就任した。

同氏の経歴から溢れんばかりのチャレンジ精神が読み取れる。
農業用機械の部品製造が主だった父の会社（青木鉄工所）で新分野開拓に努め、ロボット部品や航空機部品への進出を果たし、航空機分野では最高峰ともいえる米ボーイング社の認定指定まで取り付けたのである。



2. 東大阪のマイスター

そこでもうひとつ触れなければならないのは、東大阪というマチの特性である。

喧噪の商業大都市「大阪」の背後にひっそりと「東大阪」はある。華のある大阪に比べ、東大阪は地味な工場群のマチである。

ここ東大阪には約8000社を上回るマチ工場があり、そのほとんどが部品製造業である。高度成長期には自動車製造、家電製品、金属加工など日本技術の粋を集めた傑出した技術で日本製品を世界の頂点にのし上げた。

正に”巧みのマイスター” 集団のマチである。爾来、東大阪は技術の粋を集めた特色あるエリアとして日本の高度成長を下支えしていくのである。



東大阪市

人口 51 万人 世帯数 21 万

<http://www.city.higashiosaka.osaka.jp/>

しかし、高度成長にかげりが見え始め、円高不況、半導体不況の波が日本に押し寄せる。大手メーカーはコスト切りつめにやっきとなり、しわ寄せは中小下請けに向けられてくる。一店、また一店と廃業する工場が出始め、最近の中国の安価な製品・部品がさらに製造コスト競争に拍車をかける。コストを極限まで下げられた果て、「単なる安価な製品を目指すだけでは将来はない。どこもできない様な製品、技術の高度化にこそ道はある」

青木氏達は衰退し廃業する工場が続出するなか、技術にさらに磨きをかけ、他分野に果敢に挑戦していくのである。

ロボット部品、航空機部品・・・、新分野への挑戦は続く。取得した技術は他分野への応用を生み、遂にはボーイング社の信頼を勝ち得る。「青木鉄工所」は「東大阪の株式会社アオキ」として生まれ変わったのである。



株式会社アオキ

資本 1000 万円 社員数 34 名

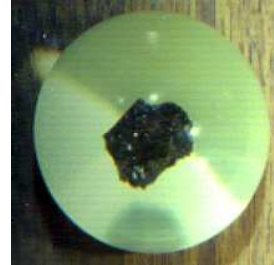
<http://www.aoki-maido.co.jp/profile.html>

3. 月の石と地域活性

小学生の時に目にしたロケット打ち上げのニュース映画や、大阪万博でみた「月の石」が青木の脳裏に焼き付いていた。航空機の部品を作りながら青木は「空」への羨望が沸々と沸き上がってくるのを感じた。

「空から宇宙へ・・・」

これを感じた瞬間、青木の目標は「宇宙」への挑戦と変わる。



月の石 (moon stone)

国立科学博物館

「”宇宙”を我が町「東大阪」の活性化のテコとする！」

青木は「マチへの想い」と「自分の飽くなき好奇心」が一本に繋がり、痺れる様な衝撃を感じる。新たなチャレンジの始まりであった。

「東大阪で「メイド・イン・東大阪」の人工衛星を打ち上げよう！」

2002年7月に「東大阪宇宙関連開発研究会」を設立。同志への熱い呼びかけ。「フロンティア”宇宙”を不況にあえぐ東大阪の地場産業に」、を合い言葉に12月には「東大阪宇宙開発協同組合」を設立し、自ら理事長に就任。2005年度の1号機を目指す。

青木氏の壮大な夢と情熱にマスコミ各社が挙って取材、青木氏の人物像が全国に知れわたるにつれ「夢」が現実に向かって歩き始める。

「自分は学もなく、粗野な無鉄砲かもしれまへんのに ハッハッハ！」

自嘲気味に話す青木氏ではあるが、軽快な大阪弁と特徴ある声に、引き寄せられる何か大きなものを感じるのだ。

青木氏は東大阪で培われた最高峰の技術と宇宙への情熱をそれこそテレビカメラが写しているのも忘れ、無心でエネルギッシュに語る。人は青木氏の純粋でストレートな夢への展望に引き込まれ、勇気が伝播されるのであろう。

「こんな自分（会社）にも、信じられんくらいの優秀な社員がいるんや。」
青木氏が社員のことを話し始めた。

「自分は単なるマチ工場のオヤジや」、と言っていた青木ではあるが、社員のことを語り始めた途端、嬉しそうに、誇らしげに、そして本人が目の前にいるかの様に一層熱っぽく語り始めた。

4. 「見上げた子や」 （社員 A）

「うちには、こんな子もいるんや。」

青木氏が最初に紹介したのが、20歳代の女性である。彼女はアオキ入社前にスイスに留学していた。

「何でこんな子がうちみたいなマチ工場に入りたいっていうんやろか。
何でも聞くと、英語はペラペラ、TOEIC とかゆう英語の検定、わしゃあ知らんけど850点とったということだ（普通の人なら450が精一杯）。それに秘書免許も持ってるっていう才媛だ。その子がうちの会社に入りたいって言う」

彼女も青木氏が出ていたテレビ・新聞を偶然見たなかのひとりだった。青木氏の語る夢に心を動かされたひとりだった。

この人と、この社長と自分の可能性を試してみたい、そう思ったに相違ない。
面接が終わり、「よし、明日から来れるか？来たら掃除でもしとけや」
あっさりとした内定（試用採用）だったが、青木の内心では、「今の子は飽きっぽい、数日で来なくなるかもしれんな」と感じていた。

翌朝、きれいに掃除された事務所に一瞬とまどいながら、彼女と話す。

「私、ふたっだけお願いがあります」

「なんや」

「パワーポイント（コンピューターソフト）を買ってほしいんです」

「え？ なんや、それ？」

「社長の人工衛星の話には心が動かされます。素晴らしいお話です。私もこの夢の実現に立ち会いと思いました。」

「それと、そのパワー何とかつうのと、どんな関係があるんや？」

「プレゼンテーション用のものを作るのです。社長のその素晴らしい構想を具現化し、ビジュアルで補完するのです。表現力が増します」

「何?? ちょっとよくわからんが、それはいくらするんだ？」

「言っとっけど何百万なんて金はないゾ」

「2・3万円もあれば買えます」

「へ?」

「そ・そんなモンか。そんならこれで買うて来い！」

「はい、ありがとうございます」

嬉しそうに駆け出す彼女をみて何やら狐にでもつままれた様な気がした青木だったが、数日後、そのパワーポイントで作られた彼女のプレゼン（内容は青木自身のプレゼンなのだが・・）を見せられた途端、あまりの素晴らしさに絶句したという。

※ 本講演で時間があれば、その内容（パワーポイント）を写したかったとのことだが残念ながらその時間はなかった。

それから数日後。

「ところで、もうひとつお願いがあったんじゃないのか？」

「はい」

「言ってみい」

すっかり気分を良くした青木は、些細なことならすぐ OK しようと深々と身を椅子に沈ませ余裕の表情で聞いた。

「実は ヒューストンに行きたいのです」

「な・なんやて? ヒューストン ! ?」

あまりの唐突なことに宇宙遊泳でもしているかの様に目は空を彷徨い、目眩めまいを感じた青木であった。

聞くところ、彼女は宇宙工学協会員（学会会員）であり、どうしても開催地のヒューストンに行きたい、お休みさえもらえれば、旅費は自分が払うと言う。

向学心に感心した青木であったが、何より我々がやろうとする人工衛星製作の一助になるかもしれない。

「よし、行ってこい。旅費はいくらや、払うてやる」

彼女の意気込みに太っ腹になった青木はOKを出す。
安ホテルを彼女が現地を探すということで彼女が一時費用を立て替え、帰ってきた後で会社が精算するというので話はまとまり、彼女は単身ヒューストンに飛ぶことになった。

飛び立ってから数日が経過した。
しかし、彼女は戻ってこない。1週間がたち2週間が過ぎるころになり、さすがの青木も心配になった。

「何か事故でもあったんやろか……。若い子が単身で米国に行くなんぞ、許した自分が悪かったか……。」

毎日のニュースが気になりだし、アナウンサーの「昨夜アメリカで……」の声に敏感になる青木であった。

ちょうど3週間がたった頃、彼女が元気に顔を出した。

「おおっ、何やとった。心配したで！」

きょとんとする彼女から話を聞くうち、青木にもようやく事態が飲み込めてきた。学会発表会は数日で終わるものではなく、数週間のスケジュールで行われるということ。

「そうか……学会つつうところは一泊二日の遠足とは訳がちゃうんやな」
その旨の説明は確かに受けてはいたが、ヒューストンに行くという突拍子もないことに他の話が耳に入らなかった。

「まあ、無事に帰ってきたことは何より。いい勉強もしてきたようだし、良かった良かった。そうそう、それじゃ後で旅費の請求してや」

これは9月のことだったが、1カ月たっても彼女からの請求がこない。
3週間の宿泊費にしても決して少額ではないはず。彼女の懐事情も決して豊かではないはず。

「どないなってる？ はよ、請求しいな」と促しても彼女は「はい」と言うだけ、なかなか請求書を提出しない。

もうほっといたろか、と思っているうち、暮れが過ぎ、年が明けた。

「おい、どないした。なぜ請求しないんや」

「はい・・・あの・・・」

次に彼女から出た言葉に青木は大きな衝撃を受けた。

「3年後に頂いていいですか？ それまで社長に預けます」

「・・・なんやて」

これから人工衛星を打ち上げようとする（株）アオキは確かに関西では今や知らない人はいない会社である。手をかしてくれる協力者も次々と名乗りを挙げた。

人工衛星事業は順当な滑り出しをみせてはいたが、まだ助走期間に過ぎない。何せまだ飛ばしていないのだ。

人工衛星事業は先行投資である。衛星事業による収入は当然まだゼロである。

現在の会社の経営は本業の金型製作や航空機部品などで保っている。

それとて順風満帆という訳ではなく、経営逼迫のなかでさらに投資を行っているのだ。

「3年後にったって、おまえ・・・」

「衛星事業は必ず実現します。人工衛星の使用用途は100を下りません。ヒューストンの学会に行かせてもらい、確信いたしました。

一号機が上がるのを見届けてから頂きます」

彼女は、これからの事業（人工衛星）に取りかかる一方、横目で会社の経営実態を知り、とても請求できる気になれないでいたのだ。

「皆さん、こういう子がうちんとこの社員や。 まだハタチそこそこの子や」

青木氏は我々聴講者を正視し、誇らしげに言った。

5. 「見上げた子や」 (社員 B)

「うちには、こんな子が他にもまだいるんや。」

ドクターコース (博士課程：宇宙工学専攻) 在学中の20歳代の男子学生は、卒業を1年後に控えた年に入社したいと言って面接にきた。

「是非、ここで働かせて下さい！」

「今ここで働きたいって、君、大学途中で辞めてまで入るところちゃうで」

これまたとんでもない若者が飛び込んできたと感じた。

「そもそも親御さんには話ししたのか。君には前途洋々の将来が待っているやないか。何でそれを捨ててまでここに来る気になったんや」

青木氏は「頭を冷やせ」という感じで滾々と青年を思い止めらそうと説得するのだが、青年は本気の様で、既に親も納得済みと言う。十分に冷静に判断した結果だと言う。熱意に根負けした青木は、

「よくわかった。採用や！ ただし条件がある。

博士号を取ってから来い、1年後しっかりと大学を卒業してからうちに来い」

青木氏はまた聴講者を正視し、

「今の若者、根無し草とか根性なしとか言われているが、そんなことはない！ しっかりとした自分を持ち、熱意に溢れている若者がぎょうさんおる！ ないのは夢のある舞台や！ 自分を賭けるに相応しい舞台や！」

6. 種子島の地中で

「っとまあ、こんな具合で、私んとこの会社をいろいろなところでしゃべらしてもらってんけど、この前テレビの特番とかで私んとこ取材に来たんや。会社のなかも隅々まで撮ってたわ。これ、この前放映されたけど、これがまたええんや〜。最高の出来映えやで。5分くらいやからこれから見せます」

青木氏自身がみて、最高の出来映えという「この番組」についての講釈が続く。



「取材に来たのは、若い女性のディレクターやった。才能あるんやなあ、工場のなか映しとるんやけど、いいんやなこれが。

薄暗い明かりのなか金属くずがちらばっ

とる。くずが画面端に映り、下から見上げる様に工場なか撮ってんのや。

いやあ、いかにもマチ工場って風情やな。この場面だけで今の東大阪のマチ工場の現状がわかる。ほんまうまいなあ。

またバックに流れてる音楽、これもまたいいんや」

スクリーンが降り、会場のライトが暗くなる。

「ちょっと、待ってえや、まだ話すことあんねん」 (場内 笑)

「そして人工衛星の話に場面が変わるんや。H 2 ロケットの打ち上げちゅうことで、打ち上げ場面に招待されたときの映像や。

種子島まで30人乗りくらいのだこかのチャーター機で行ったんや。

チャーター機やで！ (笑)

M 電機の会長さんも乗ってたね、お付きの人がぎょうさんいて、自分も同じ飛行機に乗り合わせて光栄と思ったねえ。

島についたら大勢の取材陣が待ち構えているねん。さすが、大物は違うなあと思っていたら、何と取材陣は M 会長のところやのうて、自分のところにわんさか来よる。この時やねえ、私のやろうとしていることが世間でかなり注目を集めているんだと認識したのは」

再びライトが暗くなる。

「まだ待ちゅてんねん！」 (場内 爆笑)

「種子島に行って、ロケット打ち上げを見ているシーンがあるんやけど、涙拭いているとこ映されてるんや。何で涙が出てきたかっていうのをちょっと説明させてえな」

「ロケット打ち上げちゅうのはもの凄い爆音と爆風やから、近くではよう見られん。それで用意された場所ってというのが、発射台から6 km 離れた場所にあるんや。

そこなら万が一のことがあっても大丈夫や。通されたところが VIP ルームや。
VIP ルームなんて初めて入ったわ。
居心地悪いもんやなあ (笑)

そこでもっと気楽などこないかって現地スタッフの人に聞いたら自分のとこの庭で見ま
せんかって言ってくれる人がいたんや。
発射台から 4 km のところにあるらしい。外だけど宜しいでしょうか、って聞くから二つ
返事をお願いしますって言ったわ。

発射までまだかなり時間があるので、
実際に発射台まで連れていってもらった
んだけど、ありゃあすごいね。発射台っ
てビルみたいなモンよ。てっぺんまでの
エレベータがあってね、まさしく地上何
十階建てのビルや。

それから発射台の地下に行って驚いた。
映画でみるのと同じや。NASA の指令管
制室がテレビで映るわね、あんな感じや。



種子島宇宙センター

<http://www.jaxa.jp/about/centers/tnsc/>

そこは広い階段状のホールになっって、びっちりエンジニアがいるんや。正面には大
きなスクリーンがあってな、机の上にはコンピュータやら何やら機械で埋めつくされてい
るんや。
聞いたら 200 人って言ったね、200 人のエンジニアが発射台の下に潜って発射させる
んや。

発射が成功したら、地響きが残るなか全員が総立ちで万歳するそうさ。ロケット一発上
げんのに何百人の人がかかわっているんやね」

発射時間が近づいてきて、その現地の人のお家に連れていってもろうたんや。
お母さんが出てきてね、先生どうぞどうぞと言うんや。

「先生」でっせ。 (笑)

こんなところで申し訳ないっちゅうんや。いやあ、こちらこそ突然お邪魔しちゃいまして
ってことで、ほんまに恐縮したわ。

庭に出て驚いた。本当に目の前にロケットが見えるんや。こりゃあさっきの VIP ルー
ムなんかより数倍ええわ。 (笑)

いよいよ発射時間が迫ってきて、心んなかで一緒にカウントダウンしたわ。点火のとき
は凄いの一言やね、地面が揺れるんや、空気の振動、そして爆音、強烈やでえ！

こんときからずっとテレビカメラが私をずっと撮ってたんや。

ロケットは凄い爆音のなかゆっくりと上がっていくんや。きれいに澄んだ空に向かってスピードを上げていくんや。

我を忘れロケットが轟音のなか空に吸い込まれていく瞬間までずっと見ていた。

そんなときな、さっき見た発射台の下の200人のエンジニアが万歳している光景が目につかんだんや。

「万歳！万歳！」てな。

そのとき自然と涙が出たんや。200人の地下のエンジニアのことを思い出してな」

「それじゃあ、ビデオ見てもらおうか。ホント良くできてるで。

そやそや、番組のなかインタビューを受けて私がいろいろしゃべってんやけど、聞きづらいうんやろか、私の話しているところだけ字幕が出てんねん！」（場内 爆笑）

今度こそライトが消され、ニュース番組のビデオが流された。

壮大な宇宙のシーンから始まり、地球、日本、そして東大阪にフェイドインしていく。東大阪のマチ工場群、「株式会社アオキ」の紹介、青木氏の人となり、そしてインタビューへと続く。

種子島で発射したH2ロケットを見上げているシーン。

「東大阪宇宙開発協同組合」の設立が認可され、小泉首相に報告、励まされるシーン。

「メイド・イン・東大阪」の人工衛星を打ち上げるんや！

首相：「これが飛ぶのか？」

青木：「何言ってまんがな、これは模型でんねん」

5分くらいあつただろうか、青木氏が気に入っているだけあって、夢があり味があり、わかりやすく良くできている内容だった。

再びライトがつき、講演は佳境に入る。



7. 社員との祝杯

ビデオが終わり、会場は拍手でいっぱいとなった。

「先ほど小泉首相と私が映ったでしょ。ここまでくるのが大変やったんや。何せ開発や研究には何かとお金がかかる。本業やっってもなかなか余裕はない。しかし、どういう訳か苦しいときにタイミング良く何かと助言してくれたりする人がおるんやな。

NEDO という国家プロジェクトがあって、そこには先進技術や新開発をバックアップする仕組みがありますねん。だけど応募するだけではダメでっせ。厳しい厳しい審査があるんや。

応募している企業は皆、そうそうたる大企業や。大企業が数十社ダーっと並んどる。ワシら中小はどうしても見劣りする。だけどまあ、ダメでもともとや！ 社員がほんと一丸となってこれに賭けたんや。

数日後、最終審査に残った数社んなかに内んとも入っていることを知らされましたんや。残すは最終審査ですねん。

最終審査は面接とプレゼンテーション。いやあ、張り切りましたでえ。終わったときは声も枯れてくたくたや。もうやることやり尽くしたって感じで爽快感と疲労がどっときましたわ。

^{しばら}暫くして結果がきました。

採用や！合格やで！ー。
並み居る大企業を差し置いてワシらんところが採用や！

苦しいときにチャンスありやなあ、より一層社員の気持ちが高まって、苦しいながらも着実に開発は進んでいます。

ある時、そのときの審査官とお会いすることがあったんです。偶然やな、ほんとぼったりとお会いできたんや。私にはどうしても聞きたいことがひとつありました。どうしてうちの様なところが採用されたんかってことや。大企業とうちとでは携わる人間の数も違う、研究規模も違う、そもそもバックヤードが全然違います。

私はその審査官に聞いてみました。

「それはあなたの情熱です。企画内容も立派だが、何よりあなたがこの開発に賭ける熱意が伝わってきました」

こういう答えが返ってくることを想像していたかもしれませんが。しかし、その審査官から返ってきた言葉は違いました。

審査官は少し微笑んでこう言ったんです。

「それは、あなたの後ろにいた社員です。
社員の目の輝きです」

私はその言葉を聞いたとき、頭んなかで真っ白になりましたわ。「ありがとうございますー！」
ずっと頭を下げっぱなしでしたわ。

帰ってきて社員みんなと祝杯をあげました。最高の気分でしたわ」

8. 本の一節

青木氏は演台の下から一冊の本を取り出した。
かなり読みこまれた様で、黄色い表紙が黒ずんでいる。
青木氏はふうと一度ため息をつき、今までとは違いゆっくりとした口調で話し始めた。

「皆さん。私は日夜、旋盤や金属加工の仕事に明け暮れ、恥ずかしながら本らしい本など読んだことがない。けどこの本だけは違うんです。何度読み返してもええのや。この本は私の先生なんです」

「全部を紹介したいんですが、この場では無理ですわな、そのなかの一遍だけ紹介させて下さい」

青木氏はゆっくりとページをめくり、中ごろで指を止めた。

「これは20歳代の女性の投稿文です。あまり長くはありませんので少しの間、聞いて下さい」

青木氏はゆっくりとしっかりした口調で読み始めた。
ところどころで声が詰まる。
300人の会場はしんと静まりかえり、青木の朗読に聞き入った。

-----朗読----- (20歳代 女性 投稿) -----

先日の吉祥寺での合コン（合同コンパ）でのことです。
男性女性とも20歳代の会社員とOLでした。5人ずつ迎え合わせに座り、初めからリラックスしたなか和やかなムードで始まりました。
幹事以外は皆、初対面ですので、軽い会話を終えた後に男性から順にひとりずつの自己紹介に移りました。

「〇〇株式会社の〇〇です。〇〇部で〇〇の仕事をしています」

このとき、誰もが知っている大企業に勤めている人が自分の会社名を言うとき、少し誇らしげに聞こえるんです。会社の意外な側面などをユーモラスに披露したときは、ああ、あの一流会社も結構面白いところもあるのねって感じで結構「場」が盛り上がるのです。

自分の名刺を参加者全員に配っている人もいます。もらった方も「あの有名会社」の名刺だってことで喜んで頂戴するのです。

皆の知らない会社に勤めている人のなかには会社名を言わなかったり、あやふやにすることもあるのです。
でもそれは皆の了解事項で、あえてそれにとやかく言う人はいません。
会社名はタブーなのねって感じで、それには触れず、場の雰囲気壊さぬ様、和やかにお互いの自己紹介が進んでいくのです。

A君の番に廻ってきたとき、A君はみんなに^{たず}尋ねました。

「皆さんは〇〇会社を知っていますか？」

A君は参加者ひとりずつに、〇〇会社を知っていますか、と聞くのです。

聞かれた人は首を傾げて愛想笑いをしたり、なかには^{うつむ}俯いたりする人もいました。

A君はひととおり皆に聞き終わった後、こう言ったのです。

「皆は知らないと思いますが、〇〇は私だけが知っているいい会社です。
今は皆さんは知りませんが、将来、誰もが知っている会社になります」

楽しかった会が終わりと、皆が帰途につくとき、一流企業の人A君のところに歩み寄りこう言いました。

「さっきの君の挨拶、すごく良かった。
君の会社はきっといい会社に違いない。
僕のやっている仕事は、重要な仕事なのか、どうでもいい仕事なのかもわからないことがある。自分がやっていることは会社全体のなかのどの部分なのかもわからないこともあるんだ……。
僕は君のことが羨ましい」

私は帰ってくるなり、A君の会社を調べてみました。決して大きくはないものの、先進的なことや独自性のある優れた事業をやっており、着実に業績を伸ばしていることが判りました。

私はA君の言ったことを思い出し、とてもすがすがしく、嬉しい気持ちになりました。

-----朗読 終わり-----

青木氏は静かに本を閉じ、つぶやくように言った。

「私はこの本をいろいろな講演先で読ましてもろうとしますが、どういう訳かいつも途中で声が詰まってしまうんです……。

”社員がいいから会社が良くなるのか、会社がいいから社員が良くなるのか ”

卵とにわとりの関係みたいなモンでしょうかねえ、どっちが先ってことはないわなあ」

9. 郷土に

「自分達がやっている人工衛星のことがいろいろなメディアに取り上げられるにつれ、力を貸してくれるところや仲間も増えてきましたわ。
また、東大阪、応援するでー！って言ってくれる大阪人もいます。

最近こんなこともありました。中年の女性にこんなことを言われたんです。

「今までは東大阪ってマチコウバっていか何か暗いイメージで、自分がここの出身だっけ言いつらかったんです。
だけど最近では、住所を聞かれたとき、「東大阪です」って自信を持って言える様になりました」

ワシ、嬉しくなってね、会社に戻って社員にこんなこと言われたって言いましたわ。
そしたらな、社員がこう言うんや。

「実は私もそうです。胸を張って東大阪と言える様になりました」

「社長、自分もそうです！」

ワシらはマチに育てられたんや。
マチに恩返しせなあかん。マチを作るんも、人を作るんもな。

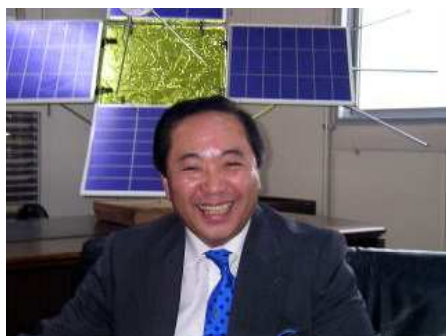
・・・郷土愛って本当にいい言葉や。一番大事なことや。

私はモノ作りの街、東大阪を元気にしたい。東大阪だけでロケットを作るんや。

記念すべき一号機は「まいど一号」や！

夢を打ち上げるんやない。夢で打ち上げるんや！

<< 終 >>



青木豊彦 <http://www.aoki-maido.co.jp/profile.html>



10. おわりに

以上で講話録を終わります。

青木氏の様なことはなかなかできません。しかし我々でもできることはありそうです。

「地域に関心を持ち、自分の得意分野で、僅か5%の余力を地域に捧ぐ」

この結集で留萌に青木氏ひとりを生み出すことくらいはできそうです。

☆∴∴ 澤井 篤司 ∴∴∴∴∴∴∴∴∴ (2004.11.16) ∴∴☆∴∴

